

『仮名書き法華經』における語彙考察

萩原 義雄

《書誌情報と語彙考察の意味》

漢譯『妙法蓮華經』が本邦に伝来して書寫・講讀・注釋していく過程を茲に詳細に語ることはしないが、現在傳存する法華經資料として聖德太子自筆『法華義疏』（六四五年成）は最も古い文献である。漢譯『妙法蓮華經』八卷の書寫された資料は、各時代毎に枚挙を問わない。この流れを仏教史の観点で云えば、最澄が比叡山延暦寺を建立して天台宗を開き、『妙法蓮華經』を根本經典として已來、平安朝の貴族社会では、写經成仏・女人成仏を説く法華經信仰が隆盛を迎えていく。『妙法蓮華經』は、第一「序品」から第二十八品「普賢菩薩勸發品」に及ぶ二十八品から成り、さらに、開經（『無量義經』）と結經（『勸普賢經』）の二經を加えた三十卷を一具として取り扱う習慣が営まれてきた。この三十卷から成る經典を書寫するにあたって、周圍縁者複数の人々に成佛の「縁」を結ばせようという配慮から、一人あて一品一卷ずつ分擔して書寫する行が営まれて行く。「一品經供養」「結縁經供養」と呼称する。そして、一品經供養が成る當夜、竟宴が開かれ歌會が催される。この席上、結縁者三十人が各各の經意を和歌に詠む。この「一品經和歌懷紙」十五枚が現存し、藤原頼輔、寂然、源師光、寂蓮、藤原隆親といった平安時代後期の政治家、僧侶、歌人などの名を遺す。西行筆「一品經和歌懷紙」（菓草喻品）〔京都民芸館藏・国宝〕もその經裏懷紙の一枚である。末法思想が盛んになった平安時代末期にこの『妙法蓮華經』は、篤い信仰を集め、法華經を主題に和歌を詠むことで、その功德に預かることを願ったのであろう。西行も菓草喻品を主題に次の二首の和歌を詠んでいる。

ふたつなく みつなきのりの あめなれと いつゝのうるひ あまねかりけり

（二つ三つあるわけでなく唯一の仏の教えだけれど、あまねく衆生にふりそそぐ）

わたつうみの ふかきちかひに たのみあれば かのきしへにも わたらさらめや

（海のように深い仏の願いに縁があれば、彼岸にわたることができるのではないか）

漢譯『妙法蓮華經』をさらに仮名書きにしてみようする試みに至っては、「結縁經供養」の営みが大いに関わっていたものと見る立場にある。現存する『仮名書き法華經』の文献資料は、

- 1, 足利鐙和寺本〔元徳二年（一三三〇）書寫〕 勉誠出版、影印・翻字・索引刊
（分別功德品・如來神力品・囑累品）を欠く
- 2, 妙一記念館本〔識語欠（鎌倉時代中期）寫〕 靈友会、影印・翻字・索引・研究篇刊
（化城喻品第七の551頁から556頁に一部欠損あり。唐招提寺本版經断簡二片〔菓草喻品〕と合致

- 3, 天理図書館本〔卷三のみ鎌倉時代中期寫本〕 菓草喻品第五から三品。2 研究篇本文
翻刻に収載。

- 4, 京都深草瑞光寺本〔卷六・卷七のみ鎌倉時代中期寫本〕2 研究篇に収載。
 - 5, 故矢代仁兵衛旧蔵本〔鎌倉時代初期寫〕現存未確認資料
 - 6, 津西來寺本〔識語欠（江戸時代中期）寫〕私家本影印・勉強出版翻字刊
完本にて平安時代の訓點本である立本寺本〔寛治元年（一〇八七）寫、卷二・卷六欠〕訓が天台宗学僧宗淵上人の手で右側に付訓
 - 7, 校正図書館本〔刊本八帖〕〔寫本八冊〕
- が知られている。
- このうち、2の妙一本における研究が最も重要視され、この研究篇で多くの研究者からなる考究結果を報告している。

このうち、今発表の語彙研究に関わる考究として、次の三論文の観点を示すことにする。

一、小林芳規博士による「妙法蓮華經の訓読史から見た妙一記念館本仮名書き法華經」が知られ、ここで、(五)再読文字「當」「將」の訓法のなかで「再読字が再読表現に訓読されるようになるのは、平安中期以降であるから、その古い訓法を示している」〔75頁〕と論述され、また(六)「況」字の訓法の「何況有三」も「〇いかにはんや、三あらんや」〔方便品135②〕、「むや」118〕、(八)応答の「唯然」の訓法「たゞし、しかなり」〔授學品619⑤〕、妙626頁〕としていて、6の西來寺本も妙一本と同様であることを既に指摘してきた。

二、田島毓堂先生も「妙一記念館本仮名書き法華經における為字訓―為字和訓考の一環として―」にあつて「為」訓分類十五を以て示す。この(一)「イマス」の訓例は、妙一本・足利本が共通なかで西來寺本は、「〇ほとけ、王子たらんときに、国をすて、よのさかへをすてゝ、最最後の身をもて、出家し佛道成就したまはん。」〔譬喻品228④・妙197頁〕としていて異なる体裁を見せている。だが、(九)「ナリ四八【是】」〔133頁下〕で示す「〇われつねにそれを稱して、説法人のなかにをきて、もとも第一なりとす。五百品565①・妙568頁」〔我常称其於説法人中最為第一〕〔27中〕は、妙一本と共通する例であつたりする。

三、峰岸明「妙一記念館本仮名書き法華經における漢語訓読の態度について」の緒言で、「原漢文のある漢語は訓読され、また別の漢語は音読される。どのような漢語が訓読され、また音読されるかということは、漢文訓読の問題としてだけでなく、和訓の成立、漢字による日本語表記、漢語の受容などという、言語の面における異文化摂取の状況を考える上でも重要な問題であろうと思う」〔154頁上〕と説くように、妙一本と西來寺本は、この原漢文に対する解釈作業に全文の語形が明確にしうる全文漢字ひらがな交り文であつて、漢字表記語の右傍字音ふりがな、左傍語釈という文章形式を用いているという三点が語彙考察を行ううえで最も注目した点である。

この一、二、三の論に促され、西來寺本を妙一本と対象にして考察するうえで重要な資料であることをここで再び喚起し、今回の語彙考察の取り組みとした所以なのである。

《語彙考察と検証結果》

今回の考察は、おおよその検討をつけるに留まることから精確なデータ語数の計数値は表示しないことにした。

考察した語彙

A 国語辞典に見出し語を収載する語

1, 国語辞典に仏語（仏教語）の認定がない語
「食頃（項）」

2, 国語辞典に原漢文の語を引用するが仏語（仏教語）の認定がない語
「好樂」

3, 国語辞典に妙一本『仮名書き法華経』を引用するが仏語（仏教語）の認定がない語
「慮」「焼害」「禪窟」「鮮澤」「典籍」「倫匹」

4, 国語辞典に仏教禪籍資料と本邦文献資料を引用するが仏語（仏教語）の認定がない語
「結恨」「塵穢」「蓬焯」

5, 国語辞典に漢籍資料及び本邦文献資料を引用するが仏語（仏教語）の認定がない語
「商人」「香家」「香風」「慳悛」「孤露」「殊妙」「淳厚」「等倫」「流泉」「獵師」
6, 国語辞典に別訓み漢音などで収載する語
「鬚髮」「醜陋」「雷聲」「鈴聲」

B 国語辞典に仏語（仏教語）の認定のある語

1, 国語辞典に仏語（仏教語）の認定
「伏藏」

2, 国語辞典に原漢文の語を引用する。但し、別用例
「露地」

3, 国語辞典に妙一本『仮名書き法華経』を引用する
「退没」

C 国語辞典に見出し語未収載の語
「己利」「心意」「堆阜」「不可計」

以上の三十二の語から仏語という観点でみる語彙の読み・意味・用例といった場合、その語自体の取り扱いの有り様とその辞典編纂での語の基軸を茲に考察してみたのである。『仮名書き法華経』に所載する此等の語を現行の国語辞典である小学館『日本国語大辞典』第二版では、どのように分類しているのかを収載語の用例を含めて、僅かではあるが検証して見た結果が此等の語の分類基準と連動していく点を見定めておくことに今発表の意図とした理由である。

Bに位置する語は「伏藏」「露地」「退没」の三語に過ぎない。また、Cの四例は、全く現代の国語辞典に反映されていない語例とみることが云えよう。こうした語に今後どのように語の分類としてのコード化認定をなしていくかを自ら問い糾すものとしてほしい。